

第6章 ネウストプニー先生を囲んで

目次

第1節 ネウストプニー先生のお話
第2節 ネウストプニー先生との話し合い

第1節 ネウストプニー先生のお話

甲斐ム 今日は大阪大学教授のネウストプニー先生をお呼びして、これからの日本の国語教育のあり方についてお話をいただくこととなります。ネウストプニー先生は皆さんご存じのとおり、世界的に指折りの日本語教育の先生ということで、言語学の立場から、様々なご示唆をいただいている方があります。私も、国語教育の改善という問題を考えていくときに、日本語教育の立場からの発言を非常に期待しているわけです。国語教育という領域は、我々が所属しているときに、どうしても部分的なところに力を入れすぎて全体を見落とすところがある。それを、日本語教育の研究者にいろいろとこれまで指摘していただいているわけですが、その中でもネウストプニー先生は、世界的な視野に立ったご指導をいただけるものと思っております。今日はこれから1時間ほど先生にお話をさせていただいて、その後でまた1時間ほど、我々がいろいろなことでご質問をして教えをいただく形をとりたいと思っております。何か途中で質問があったら書き留めておいて、後で是非していただきたいと思えます。また、ご参加の日本語教育の方々、そちらからの発想、ご質問で結構です。今日は先生に教えをいただくという形で、時間を設けてあります。それでは先生、よろしくお願ひします。

ネウストプニー : はい。どうもありがとうございました。飛行機から降りたばかりで耳が良く聞こえないので、声に関しては自信がないのです。こちらには、マイクがおいてありますが、日本では、マイクを使うことが多いですね。しかし、マイクというものはすこし不自然な設備だと私は思います。私は最近までオーストラリアで教えていたのですけれども、ネットワークが60人が80人くらいになると、できるだけ二つに分けて別のネットワークにするというルールがあります。これは特に、講義の場合に100人あるいは200人くらいを対象にして、マイクを持った講義をするということはなかったです。マイクといっても、例えばカラオケのようなマイクを使わせてくれるといいのです、声がきれいに聞こえます。今日は、やはり、マイクなしで話させていただきたいと思えます。

言語管理と国語教育

今日のテーマに関して、ご存じだと思うのですが私には日本の国語教育が専門ではありません。もちろんある程度接触したことはあります。というのは、子供がいて、一緒に日本に2、3回来たことがあるのですが、子供はこちらで中学校と高校に通っていたので、日本の中学校、高校がどのように習っているかということについては、ある程度、自分自身の経験を持つこともできました。また、子供はメルボルンで日本人学校に通っていました。これはフルタイムの日本人学校ではなくて、土曜日だけのもので、そのときには、私が子供のチューターとして活躍したこともあるのです。子供はメルボルンの日本人学校が非常に嫌いだったというのは、できなくて自信がないのに行かなければいけ

ないからです。そのカリキュラムは文部省で決めたカリキュラムと全く同じことを教えていましたから、オーストラリアで育って日本で半年か1年くらいしか過ごしたことはない子供には非常に辛いものだったようです。これは私達の子供だけではなくて、相当のパーセンテージの子ども、クラスで同じような問題を持つ子どもがいたと思います。

ただ、ある程度の情報が入っているというだけで、私が国語教育について発言するためには、全くベースがないと自分で思っております。実は、私の専門は言語問題処理の理論です。その方面では日本でも発言しませんが、国際的に発言する機会が多いです。ところで、この言語問題処理の理論から出発して、特に異文化接触の場合の言語問題と、日本人と外国人の接触問題を研究してまいりました。また、さらにそこから出発して日本語教育にも非常に興味を持っております。このような仕事をしていきますから、国語教育と共通の問題がたくさんあるのです。しかし、今日、何か提言するというよりは、やはり質問することが多いだろうという感じがします。最初の60分は、私の計画にそって私がお話ししたいことをお話しします。これはもしちょうど興味を持っていらっしゃるものになったら、お許しください。

言語管理

私の専門は言語問題処理の理論だと申しましたけれど、この分野は普通、「言語問題処理」という名前では知られているのではないと思います。実は私自身も、言語問題処理というのは特殊な別の意味で使っていますけれども、普通の言い方は、三つあるのです。一つは「言語政策」です。また、言語政策と一緒に言語のcultivationがありますが、これは「言語の文化」ということばが訳語になるのでしょうか。最近、三省堂の言語学事典に言語政策について書いたときに、別の訳語（言語の修正）をつくりましたけれども、それが一つのレベルです。言語政策と言語のcultivationです。それから2番目のレベルは「言語計画」です。言語政策は非常に伝統的なものなのに、言語計画は1960年代から始まります。さらに3番目の段階は「言語管理」です。この言語管理という理論は1980年代の後半から登場しました。

まず、言語政策と言語文化について少し詳しく申し上げますと、言語政策とは、主に一つの言語の選択、「この言語にしようか、他の言語にしようか」という問題を取り扱うことが多いです。戦前の日本にもこのような言語政策はもちろんありました。朝鮮語関係やアイヌ語関係とか、非常に政策的なところが強かったです。もう一つ同じグループの中にあるけれども、言語のcultivationは、アングロサクソンの社会ではあまり使われていません。これはどちらかといえば中部ヨーロッパ的なもので、ドイツやチェコで大きく問題になりました。このcultivationというものは、大きな問題を取り扱わないで、わりと小さな問題、正書法の問題や、個々の単語をどうしたらいいかというようなことを問題にしています。日本の国語審議会のほとんどの仕事は、この「言語のcultivation」の系統ではないかと思います。言語政策の理論は、理論といえるような近代的な理論はあまりないのです。言語のcultivationに関しては、プラーグ学派をご存じだろうと思いますけれども、近代の言語学の一つの代表的な構造主義の学派だったのですが、このプラーグ学派には、言語のcultivationの相当に詳しい理論がありました。

これらのアプローチはだいたい戦争が終わって10年くらいはまだ代表的なアプローチとして続いていましたけれども、1960年代から言語計画（language planning）という研究分野が現れてきました。この言語計画の最も代表的な人は、ハウゲンです。ノルウェー語の名前ですが、彼は二世で、

「アメリカ人ですか？」と聞かれると怒るような人だったのです。もちろんアメリカ人です。それからフィッシュマンや、ルビンやイエルヌッドです。クーパーが1989年に、**Language Planning and Social Change**という、言語計画の入門書を書きました。彼は、言語計画の対象になるのは、だいたい三種類の問題だといっています。最初の二つは言語計画では非常に代表的なもので、誰でもそうだと思っています。一つは**status planning**。**Status planning**はことばの身分を決める計画行動であって、どのことばを選択するかということの問題にしています。これは言語政策とほぼ同様な問題を取り扱っています。2番目の種類は**corpus planning**です。**corpus planning**とは、言語の手段を計画の対象にするような言語計画で、ほぼ**language cultivation**に該当します。ところで、クーパーが初めてここでもう一つの**planning**があるといっています。これは**acquisition**（習得）**planning**です。つまり言語を習得するための計画というものがあるといっています。言語計画の理論ではこのような見方は結構新しく、必ずしも初期からあったとは言えません。これで初めて言語計画という理論の中で、**status planning**（つまり言語政策）や言語の**cultivation**と、言語習得が同様なフレームワークの中に入ったわけです。それまでは、私達は言語習得が何であるかということはよく位置づけることができなかつたのです。もちろん言語習得は外国語習得と母語習得（つまり国語教育）のことだけでも、何となく別個のもので、言語学の他の分野とはどのような関係があるかということは私達にわからなかつたのです。クーパー自身は母語習得のことはあまりいいませんけれど、それは一つの可能性としてはこのフレームワークの中に存在すると言えます。

3番目の理論は言語管理です。言語管理はだいたい1985年からはじまりますが、これは、特にJernuddと私が開発したもので、言語計画よりも少し広いフレームワークを提供しています。もっと広いフレームワークとは、言語に対する行動を全部あわせて、**language management**という研究分野に入れてみたのです。日本語では私は言語管理ということばを使っていますけれども、訳語としてはあまりよくないということをととき言われます。しかし、「管理」とは堅い意味の管理しかないわけではなく、例えば健康管理のような柔らかい感じの管理もあって、結局、現在も言語管理ということばを**language management**の訳語として使っております。この言語管理では、最近まで私達があまり興味を持っていなかったことが研究の対象になります。もちろん、**status**や**corpus**、**acquisition**という問題が全部入りますけれども、例えば、異文化接触におけるコミュニケーション問題、あるいは翻訳と通訳の言語問題、言語の中の男女差の問題とか、いろいろな問題が含まれます。言語習得の問題ももちろん入り、外国語教育はもちろんのこと、母語教育もこの中に入れることが簡単にできます。結局、言語管理の場合には、母語教育もその中の一つのものとして含まれるから、そのフレームワークの外でつくったモデルを、私達が母語教育の場合にも使えるようになるだろうと思われまふ。ただ実際には母語教育を言語管理の観点から取り扱った研究は、現在はまだありません。少なくとも私はそのような研究を知らないのです。

1．現在言語管理の問題点

さて、現在の**language management**の理論の中で、まずどのような問題が議論の対象になっているか、それから、その場合には母語教育のために、そこから何か提言が取り出せないかということを考えていきたいと思ひます。だいたい4点しかありません。

1.1. 言語問題をどう特定するか

言語問題をどう特定するかという問題があります。つまり、現代の言語管理の理論の中で、言語問題が存在するということが、どういうふうに認定できるか、そういう問題です。今までのアプローチで、つまり **language policy** と **cultivation** , それから **language planning** では、言語問題は言語問題処理の関係者が定義するものだということが全く当然だと思われてきたのです。つまり、関係者がいて、話し合っ、あるいは新聞か専門雑誌に論文を書いて、その中でこのような問題が存在する、それを私達が何とかしなければならぬ、と決めるような過程です。つまり、何が問題になるかということは、言語問題処理の関係者が決めるというアプローチだったのです。これは教育だけ、あるいは母語教育だけではありません。もちろんそこでも同じようなアプローチが使われてきたのですけれども、**language policy** , **language cultivation** でも同じような手続きがとられてきました。ところで **language management** はそうではなく、言語話者が談話の中で何を問題だと考えているかということをも基盤にしています。つまり、言語話者がどう思っているか、例えば、外来語を知らないことが問題かどうかということは、言語学者、言語に関するジャーナリズムで活躍する人、あるいは文部省の人が決めるのではなく、実際に話し手が談話の中でこれが問題だと考えているかどうか問題になります。ところでここからでてくることは、調査研究の必要性です。しかも、いわゆるマイクロレベルの調査なので、具体的な談話を扱う研究が必要だということになります。しかし、このような研究は、現在は一つ二つくらいの例を除いて、日本語だけではなくて他の言語の場合にもないのです。私達は非常におとなしいです。「私達」というのは、言語計画や言語管理の関係者で、ある問題に関わっている人達が「これが問題だ」といった場合に、それをそのまま取り入れて、それではそれが問題だ、どうしようかというやり方でやっています。

国語教育との関係はどうでしょうか。このような考え方を適用しますと、国語の専門家がどう思うかではなく、まず日本語の使用者が何が問題だと思うか、これを出発点にすべきではないかということになります。私はこのような調査はしていませんけれども、ただ、私が日本語の関係者の一人として、自分の意識を調べますと、現在は国語の状態はそれほど悪いとは思えないのです。つまり、日本語が非常に乱れているということはないと思います。ところで、個々の点ではいろいろ問題があるだろうと思うのです。まず、読み書き能力の問題が存在すると思います。戦後に大きい調査が二つあったのですけれども、最近では代表的な識字調査がありません。ただ、他の社会の経験から考えますと、世界の先進国ではだいたいどこでも10%、15%くらいの人口が、いわゆる **functional illiteracy** で悩んでいます。機能的文盲というのでしょうか。つまり、彼らが満足できるほどの識字は持っていないという状態だから、日本の場合にはこれが10%より低いはずはまずないと思われます。ただ、この問題は表面下に隠れているのではないかという感じで、これからなんとかしなければなりません。

最初は調査が必要だと申しましたが、ここで調査といいますが、**language management** ではどのように調査をするかということについても、わりと詳しい考察があります。まずアンケートは一切使わない。私がこうだと思っているような意識調査はためにならないので、実際に何が起きているか、何があるかということをも直接調査するような方法論を使うべきだということが言語管理の理論の主張です。

もう一つの問題は **computer literacy** の問題だと思います。というのは、これは言語だけの問題ではないけれども、キーボードを使うから言語の問題にもなります。ご承知のように、日本の **computer literacy** は世界的に見て低いです。ここに非常に大きな問題がありますが、その原因の一つはキーボ

ードではないかと思うのです。ただ、これは私が今こうだといって、すぐ言語管理の対象にしてもらいたいというわけではありません。私が言っているのは、調査すべきポイントの一つではないかということです。もちろんキーボードのことだけではなくて、他の要因もあります。例えば、日本では、広範囲にわたる専門的知識が要求されているから、つまり、コンピュータを使うのではなくて、全人口がコンピュータの技師にならなければならないというような考え方があるのです。結果としては、相当のコンピュータの知識を持っていないと使えないのです。私が知っている人達は、コンピュータを買ってそのままおいています。ソフトを入れることもできないのです。ソフトを入れるということは、彼らができるはずだというような考え方があるけれども、それはダメだと思うのです。そのようなことは店の人や専門の人がやって、使う人はコンピュータを使うのです。コンピュータのお世話をするのは別の仕事だという考え方は、日本以外のところでは徹底しています。昔は誰でも自分の靴をつくっていたでしょう。何でも自分の庭でつくって自分で食事を作るといったやり方が、コンピュータに現在適用されていることが問題です。これは言語の問題ではありませんが。

もう一つ調査したらどうかと思うことは、私は日本語の話しことばは案外悪い状態ではないと思うけれども、口頭発表の技術が足りないということがあると思います。私のゼミの学生は非常に小さい声でむにゃむにゃ何か言っていて、私だけに聞こえないことではなくて他の人にも聞こえないから、たぶん本当だろうと思います。そこは声のことだけではなくて、そのような場面での話し方全体を見る必要があると思うのです。一つの問題はプリントです。これは日本にしかないのです。つまり、発表というものは、話しことばと書きことばの間のもので、完全な話しことばではありません。書きことばのプリントを同時に見ないとわからない。それは「むにゃむにゃだけれども、プリントがあるからいいのではないか。私達が同時に読んでいるから」とよく言われますけれども、私の考えでは、話しことばか書きことばかはっきり決めて、このような中間のものはちょっと将来どうなるかわからないと思います。私が今言いたいことは、実際に何が起きているかを調べたらどうかということです。

もう一つ調査の対象になるべきだと思うことは、反論の仕方だと思います。私が日本でいろいろな会議に出ておりますけれども、そこで人と違う意見を言うことは難しいらしいです。言わないこともあれば、また言ってけんかになることもあるのですが、もう少ししやわらかい議論の仕方があるのではないかと思うのです。必ずしもディベートの問題ではないと思います。後で申しますけれども、ディベートの場合には、実際の実質行動、私が後で社会文化行動といいますけれど、そこから離れて本当でないようなことについての話し方だから、これは全然役に立たないと思うのです。教育は実際の行動にもとづくべきだと思います。私達が仮定して、こういう問題があって、例えば私がこの立場を守るということは、実際にその立場に立っていない限りは難しいと思います。

2.2. 言語管理のプロセス

2番目の問題は、言語管理では、管理のプロセス、過程をどのように見たらいいかということについて、結構議論が行われています。この議論では、いくつかの **language management** のプロセスの段階が特定されてきました。まずいわゆる **norm** (規範) があるということです。この **norm** は国語教育では、例えば、木偏ははねないという規範があるのです。その **norm** からはいくつか段階があって、いろいろなプロセスがスタートします。その最初のプロセスは **deviation** (逸脱) です。例えば、木偏をはねさせる場合です。この逸脱は全部そのまま言語問題になるわけではありません。言語管理の場合

の言語問題とは、実際に発話の中に起こることであって、言語学者が後で見決めて決めることではないことは、前にお話しした通りです。つまり逸脱が全然気づかれないことがよくあります。だから次の段階、いわゆる **noting** が必要ですが、日本語では留意と翻訳していますけれども、留意されるかされないかという問題があるのです。留意されたら、3番目の段階は **evaluation** (評価) です。留意された逸脱がいいことか悪いことかというふうに評価されます。学校で木偏をはねさせていけないときびしく言われた人は、木偏をはねさせることは非常にいいことだと思っているかもしれませんが、「これからはそうしよう」と。しかし、学校の先生は「ダメだ、このような性質の人間はこれから生きていけないだろう」と思うかもしれません。この **evaluation** のあとで、どうするかという計画を立てます。これは私達は **adjustment design** (調整計画) といいます。これはまだ計画の段階です。どうすべきかということ。それから、調整計画を実施する、つまり **implementation** という段階があります。

ここで特に国語教育の場合には、この4番目の段階、つまり調整計画ということが非常に大事なのです。国語教育の中心的なところは、ほとんどここにあると思います。日本語教育もちろん国語教育と同じように言語管理の一つのシステムなのですが、日本語教育では、この段階にはだいたい3種類の調整パターンがあり、それはアクティビティーといいます。このアクティビティーは (1) **interpretation**, 解釈アクティビティー (この中で、説明が最も代表的なアクティビティーなので、つまり、木偏をはねさせる学生の場合にはその人に、「それはいけない、木偏の場合にはそうしない」と説明する)、それから (2) **exercise**, つまり練習アクティビティーです。うちへ帰ってから、はねないものを100回書いてきなさいというような練習をさせます。(3)は英語では **performance** と言いますが、日本語では実際使用のアクティビティーというのです。これは練習ではなくて、実際に本当のインターアクションの中で、する/させるということになります。日本語教育の中では、最近までは説明と練習しかなかったのです。実際使用のアクティビティーは、日本語教育が終わってから行われることになり、海外の場合にはコースが5、6年かかった後で実際に行われるだろうということになっていました。現在私達は、できるだけ実際使用のアクティビティーを直接教える過程の中に入れていきます。例えば7週間日本語を勉強した学生を日本人に会わせます。日本人に会うということは、ただ練習としてではなくて、実際に例えば大学に来た方、ビジター、オーストラリアの学生がどのように日本語を勉強しているかということを見たい、そういう人との出会いの機会をつくるのです。このようなことが国語教育にあるかどうかということが、私の一つの質問です。例えば、何がこの実際使用のアクティビティーになりうるかと言いますと、他の科目で国語を使うということです。ただ、他の科目で使うということは、**happening** としてではなくて、体系的に国語教育に準備があり、説明と練習がある、つまり、他の科目で何が起こるかということがコントロールされるような過程でなければなりません。これは私が大事な問題だと思います。

もう一つ問題になるのは、調整の計画と調整の実施で誰が監督者になるかということです。第二言語教育では今3種類に区別しています。一つは教師が監督者になること、つまり教室行動で、2番目は学習者が監督者になることです。3番目は無監督、これは **no control** にします。学習者監督下の行動に関しては、現在は **learner strategy** とか、**learner autonomy** ということばがよく使われているのですが、これは国語教育で取り上げられているかどうかということをお聞きしたいと思いました。言語管理、それから言語管理の一つの部門である語学教育では、このような二つの問題が、最近非常に活発に議論されるようになりました。

2.3. 言語管理は言語の管理だけではない

言語管理から提言できるもう一つの問題の分野は、言語管理は言語の管理だけではダメだという意識が非常に根強いのです。言語計画では言語、つまり、文法能力だけしか扱われていなかったのですが、現在の language management では、文法能力（grammar だから GR と略します）、それから社会言語能力（SL 能力）と社会文化能力（SC 能力）の三つの段階を区別しています。SL と SC 能力はときどき文化 culture と言われていますけれども、つまり、問題を調整する場合にはこの三つの対象が問題になります。例えば、識字問題 literacy。これは language management の一つの代表的な問題ですが、その場合には、文法能力（文法能力は広い意味の文法能力は表記も入ります）に働きかけるだけで識字問題を解決することはできないという意識は、現在は一般的になったでしょう。人が読み書きできない、それでは読み書きを教えようということでは無理だと現在ほとんどの人が認めているのです。まず読み方について社会言語能力を持っていない、それから、社会文化能力のレベルで、読む必要性がない場合には読まない。読まないといくら教えてもその知識があまり身につかないという考え方です。これは習得管理の場合、つまり日本語教育と国語教育の場合どのようなことになるでしょうか。まず日本語教育の場合には、コミュニケーションと文化を教える必要があるという意識が現れてきました。コミュニケーションと文化というのは、本当は私のことばでいいますと、社会言語能力と社会文化能力のことです。また、国語教育ではどうでしょうか。まず社会言語能力というものが本当は何かということをもう少しお話ししなければならいかもしれませんが、これは結構長い話になります。『外国人とのコミュニケーション』という小さなパンフレット（岩波新書）を書きましたが、その中では詳しく説明してあります。私は国語教育でほとんど取り上げられていると思うのですけれども、一つ一つチェックしてこれはどうかというふうに見てみればまだどこかが入っていない可能性があります。

また、国語教育の場合、社会文化能力、例えば、情報の受理を教える場合には、その情報が必要になるかどうかということはどうするか、よくわからないのです。たしかに、情報の受理のためにいろいろなことを教えるのです。読み書きや語彙。ところで、それは必要性があるだろうということを仮定してでしょうか、実際に必要性をつくるということ、これは日本語教育では私達はやっています。日本語が必要になるような場面をつくるのです。これは日本語教育の一部として、そのような場面をつくること。例えば学習者を日本人の家庭に泊らせること、あるいは日本に来させるようなことは、日本語教育の一部ですけれども、国語教育の場合には、このような考え方があるかどうかということです。ディベートの場合には、自分の意見があるように、その本当の意見をディベートの対象にすることが必要ではないかと思うのです。よくアメリカでは学生がディベートできるということが言われていますけれども、そこに一つ非常に重要な前提があります。彼らは自分自身の意見を持つように、子供の時から指導されているのです。だから、みんな、自分の意見（それはばかばかしい意見かもしれませんが）を持っています。それにディベートを実際に社会でやっているから、そこでうまく行くと思います。オーストラリアの受験英語というものがあり、学校の11年生12年生が勉強する科目です。試験を受けて、大学に入れるかどうか、いい大学に入れるかどうかということが、それで決まります。その受験英語はもちろん州によって内容が違うけれども、多くの州でときどき批判されることは、「これは英語のことではないのではないか？ これは社会学か哲学だ」というようなことが言われます。しかし、これを勉強した人達はたしかに自分の意見を持っています。その自分の意見について発表したり、それを弁護したりします。意見がないと、ただ技術としての意見交換は非常に難しいだろうと思います。つまり、私がこれから国語教育の方にお聞きしたいことは、その内容が充分の内容、つま

り社会文化知識が必ずあるように国語教育が行われているかどうかということです。

2.4. バリエーションの処理

最後のポイントは、バリエーションをどう見るか、これが言語管理の議論で大きく問題になります。もちろん地域的なものもあり、例えばアングロサクソンの言語管理では、言語政策問題処理は中部ヨーロッパのものと違います。先ほども、アメリカには言語政策というものがあったけれども、言語の **cultivation** (修正) に関する理論はなかったと申し上げたのですが、これもその一つです。これは国語教育の場合には、日本的国語教育というものがあるか、あるべきかという問題に導くと思うのです。私は漢字との関係で、何か特徴があるかもしれないと思うけれども、そうかと言えば、また日本の特殊性をあまり強調しすぎるという傾向が社会科学にあったから、どことも同じではないかということも同時に言いたい、そういうこともあります。

同じバリエーションの問題ですが、言語管理のいわゆる発達段階、つまり、歴史的バリエーションがあります。つまり **language management** の場合には、理論ではなくて、実際に人々が何をやっているかということを見ると、いわゆる **early modern** (近代前期と翻訳しますけれども) そのようなパターンがあります。これは19世紀の例えば中部ヨーロッパの場合に、ドイツ、あるいは私が一番よく知っているチェコ、それから20世紀の後半には、アフリカアジアの発展途上国にこのようなパターンが現在もあります。それからもう一つの **modern** (近代的な) パターン。それから **postmodern** というものがあるのです。考えてみますと、このようにお話しするとちょっと説明不足ということになるかもしれませんが、オーストラリアの国語教育の戦略は、現在 **postmodern** の中に入っていると、私は思います。この戦略から出てくる結果の一つは、カテゴリーづくりの教育をやめて、プロセスの方に傾いているということです。これは文法教育の問題です。文法教育はほとんどしていません。つまり文法教育がなぜ行われるようになったかといいますと、一つはもちろんいろいろな言語を勉強しなければならないから、そのフレームワークあるいはモデルが必要だということもあります。ただ、もう一つは世界のカテゴリーをつくって、世界中を分類する、これは植物学とかどこでもやっていた。名前を付けて、そしてこの「地図」を教え込むというパターンがありました。それは必要かどうかということは別として、とにかくカテゴリーをたくさんつくってそれを教えるというアプローチがありました。ご承知のように現在はカテゴリーよりもプロセスが非常に評価されるようになって、カテゴリーを教えないでプロセスだけを教えることになりました。私は文法教育はある程度残すべきものだと思いますけれども、ただ、文法教育で国語教育が助かるという立場は、現在はなかなかとれません。

もう一つ **postmodern** と関係があるのですけれども、文学を教えることです。これは実は **postmodern** ではなくて、近代の時代にもう既に始まりました。旧プラーク学派では、国語教育の中で文学を教えることを放棄したわけではありませんが、彼らは文部省に圧力をかけ、国語教育の中での文学の役割が、限定されるように働きかけました。これは必然的にそうなると思います。文学の現代社会における役割は、近代前期の社会における文学の役割とは全然違うのです。19世紀のような社会ではないから、国語教育の場合には何とかこのことを反映させる必要があるのではないかと思うのです。旧プラーク学派は、文学の代わりに実用的な文章を書けるようにするとか、そのようなことをカリキュラムに入れました。

もう一つの問題は、書きことばと話しことばですが、近代前期の世界では、これはもちろん国語教

育，あるいは日本語教育の場合にもそうなのですけど、書きことばが非常に重要な役割を果たしていました。話しことばはほとんど問題にならなかったのですが、近代に入りますと、書きことばはもちろん実際には大事なのですけど、話しことばの役割も非常に強くなるので、教育の場にも話しことばが相当に格が上がることになりました。postmodernでは書きことばも必要で、話しことばも必要ではないかというような考え方があるはずなのですけども、実際にはpostmodernの最初の段階ではまだ話しことばが一方向的に強く推薦されるということがあります。日本の言語管理は、post近代化が完了していないのです。もちろんこれはparadigmのことだから私達はいつ完了したかわからないのですけれども、でもそれほど進んでいないということは言えます。この状態がどのように国語教育に映っているかはわかりません。例えば、postmodernの場合にはバリエーションが評価されるようになります。だから国内の場合には地域言語の役割が非常に高くなって、標準語の権威が下がります。日本の場合には標準語の力がまだ強すぎるのではないかという感じがします。あちこちで東京語のアクセントをどのように指導しようかという話があるようなことを聞きます。

このようにいろいろなことがあって、結論としては、language managementの理論から見ると、今お話ししたようなことが問題にされているけれども、それは国語教育、つまり日本の母語教育の場合にもいろいろな問題がでてくるだろうと思われまます。

第2節 ネウストプニー先生との話し合い

甲斐ム ネウストプニー先生から、言語教育の立場から国語教育の問題に大きな切り込みを入れてくださいました。聞いておりました、最初は言語政策の問題を話しておられるのかと思っていたら、そのことが実は国語教育のあり方の問題にそのまま直結するという形であったものですから、私も非常に感銘を受けてお伺いしておりました。あと40分ほどですけども、先生にいろいろとご質問して教えていただくというように思います。

現在の国語科教育における言語管理の問題点

足立 質問ではないのですが、ネウストプニー先生が今お話しされた中で、国語教育に対する質問があげられたと思うのです。「言語管理ではこうなっている、日本語教育ではこうなっているが、国語教育ではそれはどうなっているのか？」という形で質問を投げかけられたと思うのですが、それについて、日本語教育をやっているものとして、国語語教育で実際にどうなっているのかということ、一つ一つ、国語教育の先生方から伺いたいと思うのですが。

甲斐ム 今、言われたことは、国語教育の方でほとんど意識されていない問題が大きいのです。例えば、話しことばと書きことばというところでいうと、この何年間か、やっと話しことばの信仰という問題が出てきて、それまでは書きことばの教育が国語教育であったわけです。ですから、どうなっていますかとおっしゃったことは、たぶんここにいる人に聞いてみると、「その問題を考えなければいけない」「初めて気づいた、無意識に思っていたけれども」ということが多かったように私は思っているのです。

安 甲斐先生がおっしゃったように、国語教育はやはり時代の流れから少し遅れてついていって

いるという気がします。つまり、いまだpostmodernには至っていない。例えば、今、言った話しことばのexerciseは、小学校低学年などで取り上げます。しかし、performanceのレベルについては、教室で扱っていきたいと意識はされてきているのですが、手を付けるストラテジーを持っていないという気がします。

高木 全体としては確かに同じように遅れているという面があると思います。特に話しことばに関しては、戦後すぐの頃、言っていた時期もあったのですが、いろいろな問題もあって読み書きに傾斜してしまって、長らくそちらの方を中心に、話しことばについての大きな興味関心を国語教育の関係者全体で持つことは、ここ何年かになったのです。もちろん、いろいろな小さな集団や個人のレベルで実践を重ねてきたものはもちろんあるのですが、大きなところで言うと、やはりそういう流れがあったと思うのです。安さんもお話ししていました、performance、実際使用ですけども、これもやはり国語教育特有。例えば高校の教科書をイメージしていただくと思うのですが、芥川龍之介や夏目漱石は、子供たちが読む必要感というよりも、言語文化として日本の文化史上大事な人だから、とにかく一回は読ませたいということがある。そういうものをまず受け取らせる思考の方が、国語教育は比較的強い。もちろん戦後すぐの頃はアメリカの影響もあり、違った時期もあったと思うのですが、だいたい明治以降全般に、そういう価値あるものを授けるという形でできてしまっている。一方では戦後からも、やはり実際に生きた場でことばを学習させるのだという動きはずっと続いては来ているのですが、それが全体の意識になるということとはあまりなくて、むしろ、最近だんだん自覚されてきたかという感じがします。

国語科教科書中心主義と教科の壁

甲斐ユ 私自身の認識として、特に小学校と中学校においては、国語科の授業を進めるときに、先生方は、ほとんどすべて国語の教科書に即した授業を行っているということが、最も大きな特徴として指摘できると思うのです。これは大規模な調査によりまして、9割以上の先生方が、教科書に即した授業を行っていると回答しています。そうしますと、読む必要性ですとか、ネウストプニー先生がおっしゃったような豊かな内容を含んだ言語活動を行っているかどうかということについて、自覚的である必要はないと考えて、教科書にあるのだからそれを教えましょうと考える人が多い。そういう意味では、まだ early modernの状態にある側面はずいぶん多いのではないかという印象は受けます。ただ一つの流れとしまして、現在世界的な動向として、環境問題ですとか、平和問題などが取り上げられておりまして、それを国語科の単元として取り込もうという先生は、少なくともおります。そういう場合の難しい点は、あなたがやっているその授業は国語科ではないのではないかという指摘が必ず出されていて、言ってみれば、他の教科との垣根がずいぶん高いことが、そういう授業を行おうとするときの悩みだと思うのです。小学校の場合には、一人の先生が多くの教科を担当しますので、国語の時間に説明の手順というものを教えておいて、図工の時間に実際におもちゃをつくってみて、そしてまた国語の時間に自分のつくったおもちゃの作り方を友達に教えてあげるといった形で、国語と図工、あるいは国語と生活科を行ったり来たりするような授業は可能です。しかしそれが中学校や高等学校に行けば行くほど、難しくなっているという印象を受けます。ですから、国語科の現在の特色として、教科書中心主義、教科の壁という問題があるという気がします。

過去を探究しがちな国語教育研究

甲斐△ こういうところが現状です。もう少し言いますと、今、日本の大学に勤めている国語教育の研究者の中の5割を越える人が、ネウストプニー先生のように、世界に目配りをして新しい方法を探究するという方向よりも、過去に、例えば明治や大正や昭和の初期で活躍した学者の業績を追い求めるという方向の方が強いのです。そのわけは何かというと、日本はやはり国文学研究の伝統がとて強い。そういう伝統があるために、例えば今日ネウストプニー先生は、世界のいろいろな研究を披露されたのですが、日本の国語教育の人がやっている多いところと言うと、古いところへ行く。例えば大正時代のという形へ向かうことが多いものですから、発信と受信という発想でいうと、かなり受信型の研究が行われてきているのです。どうのように発信して堅固していくかということよりも、やはり過去のものの蓄積をセーブしていこうという方が多かったように思うのです。ですから例えば用語でいうと、ストラテジーということばにしても、学校教育の世界で最初に日本に出てきたのが昭和50年頃だから、今から20年くらい前だと思うのです。ところが、国語教育の世界ではまだ揺籃期にある。ですから、私のこれからの思いとしては、研究の方も、それから学習者の方も、受信型から発信型へ持って行くしかないのかと思っているのですが。

初ストプニ- 私は日本の国語教育について、先ほども申し上げたように、知識が少ないのです。だから非常に小さい窓から見ているのですけれども。ただ、そこから見ると、日本の国語教育は世界的な比較で笑いものにならないと思うのです。他の国の国語教育も、このような特徴があるのではないかと思うのです。それはエスタブリッシュメントが非常に強いということと関係があるだろうと思うのです。甲斐先生がおっしゃったように、先生は国文学出身の方が多くて、なかなか世界観をかえることは難しいということは、そういうことだと思ふのです。このようなことはまず本当はどこかで前置きとしていたかったのですけれども、日本だけの問題ではないと思います。だから、海外に行くと、そこで国語教育がどのようにできているか見ることは必要なことだと思います。ただ、海外にもいろいろ問題があるのです。例えば、チェコでは1930年代にはこういうことをやっていたということを申し上げたのですけれども、現在はその傾向はそれほどはっきりしていないのです。文部省の性質が変わってきて、もう少し文学が大事にされている、少なくとも私はそう思います。それから、オーストラリアの場合にも、非常にいいところがあって、またそんなによくないところもあると思うのです。

変わらない国語教育の中の文法教育

甲斐△ 日本の今の国語教育で、とりわけ小学校や中学校にかけて問題になることに、文法教育があるのです。日本の文法教育は、50年間内容がほとんど変わっていないのです。これは皆変えたいと思っているのです、実は。そしてしかも日本語教育の文法教育と国語教育の文法教育が、だいぶ隔たりがあるのです。けれど、誰が変えるかということで、たいそう難しい問題があります。中学1年生から品詞体系というものを、発見的に進んでいければいいのですけれども、できあがっているものをとにかく一緒に学習して行くしかないということで、知識の押し売りというところがあるわけですね。先ほど、文法について二つの立場があると先生がおっしゃっていました。

初ストプニ- 二つのことというのは、一つには、近代前期においては、ことばが大きく変わります。日本の場合には明治大正昭和の初めに、やはりことばが大きく変わってきたのです。そのときには、

language management

をやっている人は、社会でいろいろな委員会をつくって、あるいは文部省を通してやっているけれども。そうしますと、言語についてのある程度の知識が非常に広く必要だということは確かです。それが一つです。もう一つなぜやっているかということは、分類を皆に教えたいということもあると思うのです。私は文法教育はまず、なぜすべきかということをはっきりさせる必要があるのではないかと思います。私の友達で、これは日本人の友達ですが、文法教育を非常に立派な、学校文法から離れたような文法教育を提案しているのですけれども、なぜそういうことを教えなければならないかは、はっきりしていないのです。私は例えば、国際教育の中での文法教育は現在必要だと思うのです。日本はただ日本語だけでやっていかれなくて、いろいろなことばを勉強する必要があります。それから、日本にまず日本語以外のことばがあるということを認めるべきです。少なくともアイヌ語、朝鮮語、英語です。それをどう把握するかということも必要だし、それからもっと国際的にいろいろなことばを、例えばインドネシア語をマスターする必要もあります。現在は外国語でなんとか勉強されているのは、中国語だけではないですか。朝鮮語もすくなくないです。近い国のことばがこんなに勉強されていないということは、将来は考えられないと思います。近いところにいろいろなことばがあって、そのことばを勉強する一つの入門のコースとして、文法のコースには意味があると思います。70年代の初めでしょうか、オーストラリアではいろいろな高校で、一般的な言語についてのコースを教えていました。そこで英語を取り上げたり、中で、また他の言語を、例えば日本語を10週間で勉強したりしていました。日本語の構造がどうなっているか、ということの説明するようなアプローチでした。そのようなコースは、私はいいのではないかと思います。ただ、文法を勉強することになると、私は社会言語能力も同時に勉強する必要があると思うのです。文法だけでは現在はもう時代おくれではないかと思います。

文法外コミュニケーション行動

甲斐ユ 今の社会言語の能力とおっしゃったのは、文法外コミュニケーション行動ということになるでしょうか？

初ストニ 文法外コミュニケーション行動は社会言語能力と同じことですね。

甲斐ユ 確かに点火ということばがここで用いられています。ようするに会った人と話し出すきっかけのようなものですが、そういうことについて私は学んだことがないのですけれども、その結果初めてお会いする人との間で気まずい沈黙が生じたりすることが当然あるわけです。それを教えるための文化的な背景が、日本にはまだ希薄のような気がするのです。そういうものを教えようとするならば、ある規範が必要になるのではないかと思いますのですけれども、日本でそれを可能にするためにはどうしたらよいか、私が個人的に抱えている困惑でもあるのですけれど。

初ストニ グライスという人がいるのですが、彼は会話の原理を研究して、その中で協力の原理というものがあることを発見しました。私達はわかっているはずだったのですけれども、本当は意識していなかったのです。会話をする二人の人がいると、その二人が同じ程度に会話を発展させる義務があるというようなことです。そこでは、小学生を対象にしても、何か教えていいことがでてくるのではないかという感じがします。私は、今日は具体的にどうしたらいいかということを上げることにはできない状態です。

古典教育について

安 日本の高等学校の話なのですが国語の時間の学習の多くを古文、つまり今から900年、1000年前の現在使われていないことばで書かれた文章の読解に費やしています。高校生にとっては、国語の勉強というと古文の勉強というほど、かなりの時間と労力を使っていくのです。その一方で古文を学ぶ必要性を疑問視する世論というものもあります。日本の場合、900年の間にずいぶんことばが変わりました。その結果、現在では使われていないことばを大部分の若者が学んでいるという状況があるのですが、それに対してどのようにお考えになりますでしょうか？私は古文について、ある程度の知識は持っているのはよいと思います。ただし現在ほど多くの時間と労力をかけるよりも、むしろ日常の言語生活の向上なりに何時間を当てた方がいいのではないかという思いがあるのですが、先生はどのようにお考えになりますでしょうか？

初ｽﾄｯﾈ 私もやはり、そんなに時間を使うべきではないと思います。私自身は古文に対しては結構好意的な態度を持っていると思います。それから、あまり読めないけれども好きなのです。ところで、これほど古文を学校のカリキュラムに残している社会はあるのでしょうか。アラブ国、あるいはビルマは知らないのですが、発展途上国はあるかもしれないけれども、先進国にはないのではないかと思います。ラテン語も、やりたければやります。でも、皆がやらなければならないということはないのです。

徐 古文と現代文についての問題は、中国の国語教育の現状を見ますと、古文は書かせないカリキュラムです。というのは、中国の古文の中では、今でも生きている哲学思想があります。子供たちは古文を勉強することによって、社会のこと、昔も今も共通している問題点がたくさん入っています。ことば自身もとてもいいことば。古文がほとんど一つの物語です。中に深い意味が入っています。ですから小学校の5、6年生、たいがい6年生のテキストには、古文は3分の1くらいでています。私の娘の教科書を見ると。ですから、中国では少なくとも、古文と現代文の両方必要になっている。

初ｽﾄｯﾈ ただ、中国は、まだ近代ではないのです。それで結局このような状態が続いています。日本語の場合には古文を現代文の中で使わなければならないということは、ほとんどないと思うのです。中国でも見方の問題です。そこではただ、インターアクションのために、つまりコミュニケーションのために必要だというふうにおっしゃるのですが、私はちょっと疑問だと思います。インターアクションだけではないでしょう。そこに一つ象徴的な意味もあるのではないかと思います。これは日本の場合には象徴的な意味もあるのです。national heritageということをや非常に強く考えている人達が、そうさせているのではないのでしょうか。それから、大学で国語国文を勉強した先生達はほとんど古文を勉強してきたから、それを残すことが教師の権利だという立場になっています。それを教師から奪うことになるから非常に難しいと思うのですけれど。だから、文部省が古文を全くやめさせることはできないでしょうけれども、例えば、今の20分の1くらいにしたら、案外に賛成の声が強いのではないのでしょうか。

甲斐ム 日本でも、理科系の大学や高校の理科系コースは、古文が少ないのです。しかし日本は国語という教科を、言語技術を教える教科とは割り切っていないで、日本の言語文化の習得による人間形成を考えているものですから。その大きな手段として古文があるわけです。だからなかなかやめにくい部分があるように思います。

初ｽﾄｯﾈ 反対する人が、たぶん翻訳で読んだら、もう少しわかるだろうし、もう少したくさん読めるようになるだろうと言うのではないのでしょうか。

甲斐ム ですから、そこで問題なのはやはり、高校の先生が、古文を読むために文語文法に入りすぎ

ていることがあるような気がします。私は古文をとることは反対なのですが、しかし、今の時間の10分の1あれば、古文は習得できる。あまりうるさい文法をいわない形でできるのではないかと思うのですけれど、これは人によって考え方が違います。

高木 私は、わからないのですけれど、国語教育関係者は皆、古典出身です。教育学出身の人は誰もいない。古典の場合はやはり、学校教育であれだけの規模で全員がやることに対する説得力がなくなっているかという感じがするのです。僕も古文出身ですから、決して嫌いではないのですけれど。直接国語教育に関わらない人に意見を聞くと、何でやっているのか、もう関係ないという感じでかえってきて、世間ではそう思っているのだと感じていたのです。お話の中でつながってくと思うのですけれど、実際の場面でことばが使われることの練習や、文学をもう少し比重を工夫するという話がでてきていて、なるほどと思ったのです。この間、大学の教育学部で、国語の学生達を中心として試験をしたときの答案を見ていましたら、今の学校の国語教育って、何て日常性から遠いのだ、何でこんなことをやっているのだということを、国語を専攻の学生ですら思っている。正確に数えたことはないのですが、半数近かったのです。なぜこんなに日常性から遠いのだということを、今更ながらびっくりするくらい数があったものですから、印象に残ったのですけれども。日本の今までの国語教育は、技術的な側面をもちろん無視していたわけではないのですけれども、人間形成や言語文化の伝授という側面に比重がかかりすぎ、特に高校にその傾向は強いのかもしれませんけれども、高校の現代文の教科書を見てもらえばわかりますが、ほとんど文学関係、文学関係の評論という形になっている。そういう教材を選ぶことから、そして、教科書をつくる時にそういう文芸的なものを外すと、まず国語の先生達に採用してもらえないことは間違いない。今まで作り上げてきた、国語教育の場の雰囲気はどうやって変えていくかということも、もしこの変え方が正しいとすればすごく重要です。先生のお話はそういう点で興味深く聞かせていただきました。

甲斐 今、中学校の文法は、昭和十何年代の橋本文法がそっくり載っているわけです。教科書がそれを変える方が望ましいと思うのです。もっと発見学習的なものに、中学生が気づいてよるこんでもっと探求するという方向に持っていきたいと思うのですが、変えようがないということがあります。

初瀬 ほとんどの国でも、国語教育、あるいは英語教育のような膨大なエスタブリッシュメント（既存の勢力）を動かすことは、非常に難しいだろうと思います。そうかといって、全然何もやってみないということは、私の主義ではありません。

甲斐 先生、ありがとうございます。今日はネウストブニー先生に来ていただいて、広い立場から、高い知見での国語教育への問題点をいろいろとあげていただきました。これを具体的に解明していくことが、今度我々の仕事になっていくのですが、またいろいろな機会に先生に教わりたいと思いますので、これからもよろしくお願いします。

初瀬 どうもありがとうございました。